

## ユダの手紙20-21節 「自分自身への愛の労い」

### 1A 信仰の上の築き上げ

### 2A 聖霊による祈り

### 3A 愛の中の自分

### 4A イエス・キリストの待望

## 本文

ユダの手紙を開いてください。私たちは、ついに、聖書最後の書、黙示録の手前まで来ました。その前にユダの手紙があります。1章分しかない短い手紙ですが、中身は豊富です。今朝は、20-21 節に注目します。「<sup>20</sup>しかし、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。<sup>21</sup>神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに導く、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」

私たちは、これまで使徒たちの手紙をずっと見てきました。ペテロの第二の手紙もそうですし、ヨハネの手紙もそうでしたが、終わりの日に偽預言者が現れて、教会の中に入り込むという危機を語っています。ユダの手紙も同じです。福音にある神の恵みを放縱に変えて、主イエス・キリストを否定する者たちが現れているので、「信仰のために戦う(3 節)」必要が生じ、この手紙を書いています。ユダは、彼らがどれほど悪に満ちているかを書き、神の裁きが怠りなくなされることを書きました。しかし、あなたがたは、こうしていきなさいという励ましと勧めを書いています。それが、今、読んだ 20-21 節です。

私たちは、問題のある人物がいる時、その問題と戦うために集中してしまいがちです。けれども、ユダはここで、これら教会に忍び込んでいる悪者たちは、神が裁いてくださるとしています。私たちは先週、詩篇 37 篇を礼拝の交読文で読みました。それは、主の前で耐え忍び、待ち望め。悪者は断ち切られ、倒れ、滅びると、何度も何度も励ましています。悪に対して腹を立てて、妬むよりも、善に対して熱心になり、誠実に歩みなさい。そうすれば、地を受け継ぐようになるとの約束です。

今朝は、ここをユダが教えています。「愛する者たち」と呼びかけていますね。神に愛され、ユダにも、神の愛で愛されている人々です。そして、「自分自身」を二回、繰り返しています。自分自身に対する投資、霊的成長です。

この悪い時代に私たちができることは、「自分自身への労い」です。神の良きもので、自分自身を労うことです。ソロモンが、伝道者の書で「8:15 ・・日の下では、食べて飲んで楽しむよりほかに、人にとっての幸いはない。これは、神が日の下で人に与える一生の間に、その労苦に添えてくださ

るものだ。」と言いました。彼は日の下で、いろいろなものを試しました。知恵や学問を得ること。快樂を得ること。事業に携わりました。すべてが空しいと言います。労苦は一日して足れり、とイエス様が言われましたが、その日その日に、自分自身に対して労いを与えることが幸いなのだとソロモンは言いました。これは靈的に、その通りだと思えます。日ごとにある、神の恵みに感謝して、そこに留まります。この終わりの日に、世界は嵐のように荒れ狂いますが、私たちは信仰と愛、また希望の中で、自分自身を築き上げ、守っていくのです。

### 1A 信仰の上の築き上げ

ユダは四つのことを勧めています。一つは、「信仰の上に自分自身を築き上げる」ことです。「あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。」と言っています。築き上げなさい、というのが一つ目の勧めです。築き上げることについて、イエス様は、洪水の中の家を語られました。「ルカ 6:47-48 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。」地面を深く掘り下げて、岩の上に立てているか、そうでないかが、すべてを決めます。洪水が来ないようにすることはできません。世は悪くなっています。けれども、洪水においても、信仰の上に築き上げることはできるのです。

そして、興味深い表現をユダは使っています。「自分たちの最も聖なる信仰」と言っています。まず、ここでの「信仰」とは、自分が信じている行為のことを指していません。自分自身が信心深くあることではありません。信じている内容です。3 節で、「聖徒たちにひとたび伝えられた信仰」とあります。信じている行為ではなく、その中身、内容のことです。福音の真理のことです。

そして、それが、「最も聖なる」と言っています。これは、ユダが、主にユダヤ人の信者に書いているであろう手紙だということを考慮に入れると、この意味を知る手がかりがあります。このユダの手紙は、ふんだんに旧約聖書の事例が出てきます。それだけでなく、聖書ではないけれども、ユダヤ人にとって大切にされてきた文書も引用しています。ですから、ユダヤ人を主な読者にしていることが分かるのですが、彼らが「最も聖なる」と聞いて思い浮かぶのは、神殿における至聖所です。宥めの日、あるいは贖罪日に、大祭司が年に一度、自分自身と家族のためのいけにえの血を携えた後に、今度はイスラエル全体のための罪の清めを行います。至聖所に入り、宥めの蓋のところ七度、血を振りかけます。このことによって、すべての罪を主が清めてくださり、罪に対する神の御怒りが宥められたことを示すのです。

このことを、ヘブル人への手紙で、著者は、キリストが十字架で血を流されたことを示していることを話していました。「ヘブル 9:11-12 しかしキリストは、すでに実現したすばらしい事柄の大祭司として来られ、人の手で造った物でない、すなわち、この被造世界の物でない、もっと偉大な、もっ

と完全な幕屋を通り、また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。」キリストが大祭司として、ご自身の血を天にある聖所に携えて、永遠の贖いを成し遂げられました。私たちは、自分の良心にキリストの流された血が注がれて、良心が清められ、「全き信仰をもって真心から神に近づく(10:22)」ことができるようになりました。

私たちが、キリストが自分の罪のために血を流し、義と認められるためによみがえってくださったこと、この贖いに自分の信頼を、自分のたましいの救いをより頼むのです。これが、最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げることです。私たちが、主の最後の晩餐、聖餐式を大事にし、絶えず、この方からだと流された血を思い起こします。それが、あらゆる偽りから私たちを守る、第一の防御になります。

## 2A 聖霊による祈り

そして、二つ目に、「**聖霊によって祈**」ることがあります。祈ることと、聖霊によって祈ることの違いは何でしょうか？一つは、神のみこころによって祈ることができることです。聖霊は、父なる神の思いをすべて知っておられます。ですから、この方によって祈れば、みこころよって祈ることができます。ヨハネ第一では、「何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださる」とありました(5:14)。

しかし、パウロは、ロマ 8 章で、私たちが今、うめいている話をしています。今は苦難があり、後に栄光が啓示されるのですが、今は、被造物と共に私たちはうめいていると話しています。いろいろ、私たちの平常心を乱すようなことが起こります。前例のないことがいろいろ起こりますね。こんなにも暑い夏は、あまり記憶にありません。少し前はコロナが流行しました。そして今現在、もうとっくの昔に終わったと思っていた、帝国主義的な戦争が繰り広げられています。そして、あまりにも当たり前前に思っていた価値観が、差別的だと糾弾される時代にもなっています。そして、個人的なことでも、周囲のことでも、自分には理解できないこと、「なぜですか、主よ」と問いたいことがあるのではないのでしょうか？

そうすると、私たちはどう祈ったら良いのか分からなくなります。神のみこころがどこにあるのかわかりません。ちょうど、ヨブが苦しんでいる時に、なぜこんな苦しみがあるのか理解できないのと同じです。その渦中にあるので、分からないのです。そこでロマ 8 章には、御霊が助けてくださると約束されています。「ロマ 8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。」

例えば、ある若者が、お金がなくて、困っています。その時に、彼にお金を貸してあげるのがみこころなのか、それとも、彼は浪費癖があります。彼に貸さないことのほうが、彼のためになり、みこころだということもあります。どちらか分からない。そういったうめきを、私たちは持っています。ですから、御霊ご自身が、私たちがうめいている時に、そのうめきと共に助けてくださり、みこころにそって、その祈っている人のために執り成しをしてくださるのです。

それは、言葉にならないで、そのままうめいて祈っている時に御霊が助けてくださることもあるでしょう。コリント第一 14 章には、「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。」とあります(15:14)。御霊によって祈る時に、異言で祈ることは、自分の知性を越えて霊で祈れるので、御霊が助けてくださるので、とても助かります。自分では何を祈っているのかわかりませんが、確かに、御霊が異言を通して、みこころにかなったことを執り成してくださいます。

それから御霊は、私たちの忍耐を助けてくださいます。「エペ 6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」御霊によって祈りなさいと、パウロがユダと同じ勧めをしています。そのために、目を覚ましていること、すべての聖徒たちのために忍耐の限りを尽くして祈ること、です。聖徒たちのために祈る時に、目を覚ましていることと、忍耐を尽くすことが試されます。私たちは祈り会で、教会のすべての人のために祈ります。そして日本の政治のために祈ります。ウクライナやイスラエルのために祈ります。中国や北朝鮮のためにも祈ります。そしてカルバリーチャペルのためにも祈ります。祈りたい気分になったら祈るのではなく、目を覚まして、引退を尽くす必要があります。

その時に、御霊によって祈る必要があります。ペテロたちのように、眠くなってしまうでしょう。飽きてしまうでしょう。何を祈ったら良いかわからない、霊的に眠ってしまうかもしれません。ですから、御霊が助けてくださるように祈るのです。

### **3A 愛の中の自分**

そして、自分自身のために、三つ目、「神の愛の中に自分自身を保つこと」があります。「**神の愛のうちに自分自身を保ち**」と言っていますね。私たちが、絶えず、自分が神の愛の中にいるという確認が必要です。ヨハネは、はっきりとどこに神の愛があるか書きました。「I ヨハ 4:9-10 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」

そして、パウロは、その愛を私たちが知るようにと祈っています。「エペ 3:17-19 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。そして、愛に根ざし、愛に基礎

を置いているあなたがたが、すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどあるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。」神の愛に満たされる必要があります。

その時に、私たちには戦いがあります。悪魔は何とかして、私たちは神に見捨てられたと思わせようと必死です。ロマ 8 章の後半は、今受けている苦しみについて、パウロが取り組んでいます。苦しみや迫害、試練などによって、私たちが神の愛から引き離されているのではないか？と思われされます。しかし、神は私たちの味方であり、だれも敵対できないと彼は宣言します。「ロマ 8:35-37 だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。こう書かれています。「あなたのために、私たちは休みなく殺され、屠られる羊と見なされています。」しかし、これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。」

午後にしかりと見ていきますが、ユダは、旧約聖書から、神の愛の中に自分自身を保たなかった人々の例をたくさんあげています。イスラエルの民は、約束の地があるのに、神の愛を疑い、不信を抱きました。神への不信によって、その愛から自分を引き離しました。御使いが、神の主権と支配に反逆して、それで墮落しました。ここでは神の支配を受けたくないという反抗心が、神の愛から引き離しています。そして、ソドムとゴモラに対する裁きですが、神の愛ではなく、情欲に身を焦がして離れてしまったのです。その他、カインの例があり、それは憎しみによって神の愛から自分を離し、バラムの場合は貪欲、コラの場合は妬みです。

神の愛は私たちを引き離しませんが、私たち自身が神の愛から、自分の罪と肉の思いによって引き離すことはできます。ですから、自分自身をいつも、神の愛の中に保つのです。

#### **4A イエス・キリストの待望**

そして四つ目、最後に、主イエス・キリストの現れを待ち望むことです。「永遠のいのちに導く、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」これは、主イエス・キリストが来られることを待ち望むことです。ペテロも第一の手紙で奨励していましたね。「I ペテ 1:13 ですから、あなたがたは心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」ペテロは、主の現れを「恵み」があると言い、ユダは「あわれみ」と言っています。

携挙の本質がここにあります。私たちが待ち望んでいるのは、あわれみです。「よくやった、良いしもべよ。あなたは小さな事に忠実であったから、大きなものを任せよう。」と言ってくださる、イエスさまの労いのおことばです。決して、「あなたはこんなひどい人間であった」というような、さばきのことばではないのです。たとえ自分の行いが、イエス様のみこころに完全になかなかたし

でも、主は、憐れんでくださり、ご自分が来られる時に私たちを守ってくださるのです。